
一つのシタイ-最期の交友-

御表裏 悠貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つのシタイ - 最期の交友 -

【Nコード】

N9043P

【作者名】

御表裏 悠貴

【あらすじ】

ひよんなことから有名人が集まるパーティーに参加することになったユウ。

そこでユウは出会うことになる……自らを殺し屋と名乗る青年と。そして起こる密室殺人事件。

刑事には相手にされず、探偵とは対立することになったユウは殺し屋と共に捜査、推理し、事件の謎に挑む。

一・〇 社長と大学生（前書き）

一応処女作ということになりますが、暖かい目で見てください。
い。

一・〇 社長と大学生

—

紅く染まった窓も、何もない部屋。
今、僕の目に映るのは二人の人間。
生きている人間が一人。
死んでいる人間が一人。

「へえ、一番乗りは刑事さんでも探偵さんでもお医者さんでも使用人さんでもなければ、警備員さんでもない。ジブンが来るなんて予想外や、人は見かけによらんなあ」

《彼》は僕を見て、心底意外そうに呟く……その右手でナイフをクルクルと回し、弄びながら。

「どうしたん？ そんな固くならんところち来いや。せっかくやし、なんか話そ」

実に友好的な笑顔を僕に向ける《彼》だったけど、この状況でリラックスしろというのは些か無茶な注文だろう。「た、たとえば……？」

それでも僕は、《彼》の要求……いや、誘いに応えようと数歩近づき、口を開く。自分の声が震えているのが分かる。

対する《彼》は「ん？」と頭の上にクエスチョンマークを浮かべ

て、続きを待っている。

「たとえば、どんな話をしようか？」

僕は訊いた。今の状況にいったいいっぱいで、話題を見つけることは中々出来ない。

けど、会話はできた。

「えっと……せやなあ」

《彼》自身、話題を用意していなかったようで、僕から視線を外し、右斜め上の天井を見つめて何を話そうかブツブツ呟きながら考えている。

この隙に逃げ出してやろうか……そう考えなかったわけではないけど、僕は《彼》を待っていた。

《彼》にとってこんなものは隙の内に入るものではないと思ったこともあるけれど、何より《彼》と話してみたいと思う僕の欲求が強かったようだ。

「そうや」

そんな自己分析を僕が終える頃に、《彼》は何か思い付いたようで、楽しそうに笑みを浮かべて問う。

「ジブン、彼女っておる？」

それはあまりにも予想外にして場違いな質問で、僕はさながらお笑い芸人のようにズッコケてしまいそうになった。

「いないよ。片想いしてる可愛い女の子が一人いるだけさ。君は？」

律儀に答える僕。

嘘は吐かない。

嘘を吐く理由もない。

全く、こんな状況で、こんな奴と、こんな話をする僕はなかなかどうして図太くていらっしやるというか何というか………どうかしてる。

しかも《彼》に訊くなんて、我ながら天晴れだ。

「あつはは、そんな人おるわけないやん」

彼は笑う。そして次に、無邪気と形容すべきであろう笑顔を浮かべて、

「なら……殺したい奴はおる？」

そう、好きな芸能人はいるのか？といった風に軽い質問口調で《彼》は問う。

その投げ掛けられた質問に、僕は答えない……いや、答えられなかった。

「おつ、どないした？黙りして………もっと話そうや。今は軽いジョークや、ジョーク」

そして手をパタパタと振り、笑い続ける《彼》だが、不意に目を細め、表情を変える。

「けど、もしホンマにそんな奴がいるんやったら遠慮せんといいや。

この俺、《最期》をもたらす殺人鬼のコウが今なら無料で依頼を受け付けたんで」

「へえ、それなら……」

《彼》もといコウの言葉に、今度は僕が笑う。

「君の足下で血を流して死んでいる、その人を殺した犯人を殺してくれないかな？」

「りょーかい、任せとき。ただしジブンの協力も必要になるけどな」

僕の依頼を、コウは最初から変わらない笑顔で快く承諾する。

これが僕と、殺人鬼コウのファーストコンタクトだった。

二

例年より暑い春。気象予報士の言う通りだなと思いつつ、僕は大学の正門に向かう。二回生になった今だから通れる近道。人通りの少ない通路から正門に行けるから、アイツより遅くなることはないだろう。

「む、今日もコウが先か……同じ講義棟だったハズなのに何でウチより先に着いてるの？」

「ふん、部活にバイトや予備校に忙しいお前と違って僕は一回生の頃から大学のあらゆるルートを調べたんだ。どこにだって近道は存在するんだよ、イサ」

「それ、自分で言っつて虚しくならない？」

少し遅れて正門にやって来た女学生は生駒^{イコマ} 伊沙^{イサ}。通称イサ。
黒髪のショートヘアにソフトボール部で日焼けした肌、パツチリとした瞳……なにより笑顔が魅力的な僕の親友。

「それより今日はバイトあるの？」

「ないよ。なに？もしかしてデートのお誘い？」

「ふざける」

悪戯な笑みを浮かべて、僕に顔を近づけてくるイサ。

この手のジョークもいつも通りだ。

「ちえ、ようやくユウが僕の気持ちに伝えてくれると思ったのに」

そしてお約束のように頬を膨らますイサ。

僕は知っている……というより知らされた。イサが僕に対して恋愛感情を抱いていることを。

まあつまり告白されたのだ。

具体的に言えば去年の夏くらいに。

「お前、僕より良い男を見つけるって言ってなかったか？」

「探して見つかるものじゃないの」

そんなイサの告白。交際の申し込みを、僕は出来る限りの誠意を持って断った。

理由は簡単。イサが僕を好きなように、僕にも好きな人がいるからだ。

「で、本当の用件はなに？」

「いや、近い内に携帯を買い替えたいからさ、色々教えて貰おうと思っ
て」

「別にスマートフォンにしくても良いと思うよ。まあ今日は暇だ
から付き合っけど」

「助かるよ、お礼に晩飯は奢るからさ」

他愛のない会話。

正直イサの告白を断るのにはかなり勇気が必要だった。

もちろんイサの方が何倍も大変だったろうけど。

そして、同時に最初は気まづくなるんじゃないかとも思った。

けど、イサは告白前と変わらず僕の親友でいてくれる。

そんなイサが、僕はアノ人の次に大好きだ。

三

「そういえばユウって明日は講義ないんだよね？」

「ああ、金曜日は講義とってないしね」

「いいなあ、ウチは再履あるし」

「それ、先週も聞いたぞ」

イサは要領が悪い。頭は悪くないんだけど、バイトや部活のスケジュール管理が甘くて必修単位を落とすことがある。そのおかげで

僕と一緒に金曜日は休みにする予定が崩れてしまった。

「お、忍海^{オシミ}さん……」

イサの指が差された先にはボサボサ頭の黒髪に無精ひげ、死んだ眼をしている男性……忍海^{オキ} 沖^{オキ}が立っていた。いや、むしろ待っていたと言っべきだろう。

僕を視界に捉えると、オキさんは待ちくたびれたオーラを全快にして僕に近づいてくる。

「よ、スキー場以来だな」

「はい、お久しぶりです。忍海先生」

「なんだよ、お前らしくもない。普通に話せよ」

「……そうですね、オキさん」

オキさんと出会ったのは三ヶ月ほど前の話で、イサとスキー場に行った時、それなりに仲良くなった。

それから特に連絡先も交換せず、オキさんの存在を忘れてすらいた今、僕の目の前に現れた。

「もしかして僕に何か用ですか？」

「ああ、もしかしなくてもお前に用がある。とりあえずそのファミレスにでも入ろうぜ、奢ってやるからよ」

もちろん生駒も……そう言っ歩き出すオキさんに、僕らは今日の予定を少し変更しなければならなかった。

昼食としても夕食としても中途半端な時間に僕とイサ、オキさんはファミレスに入る。

当たり前だが客は少なく。その少ない客も大半がデザートを食べ

ながら雑談をしたりしている。

そんな中でハンバーグのスープ・サラダセットにスパゲティ、ドリア、親子丼を頼む人はまず居ないだろう。

……いや、どんな時間でもそんなに注文する人はいないか。

「相変わらず凄い量を食べますね」

若干引きながら言うイサ。

本当にオキさんは良く食べる。一日三食を一回で取ってると言われても信じるくらい。

「ん？まあ一日一回しか食わねえからな」

「嘘つけっ！」

前言撤回。普通に信じられない……らしくなく大声でツッコミを入れてしまった。

「で、用件って何ですか？」

僕とイサはすでにデザートを食べ終わっていて、オキさんが食べるのを待っていた。そしてそれは店に入って一時間後……僕は五十分ほど暇だったわけで、オキさんがデザートの注文をする前に質問に入る。

この人は大食いではあるけれど、早食いではないのだ。

「そうだったな。一人でファミレスに入るのが寂しくてお前に会いに来たんじゃなかった」

「でしようね。もしそうだったら殴り飛ばしてます」

「あ、ウチはどっちでも良かったんだ」

オキさんはメニュー表を一旦皿が下げられたテーブルの上に置き、
懐から封筒を取り出す。

「お前にはオレの代わりにとあるパーティーに参加してもらいたい」

それがオキさんの用件。

パーティーと聞いた時、僕は露骨に嫌な顔をしたのだろう。オキ
さん表情からなんとなく分かった。

普通のパーティーなら良い。料理も美味しいし平凡で退屈な毎日
を送る僕にとっては良い刺激……というか暇潰しになる。

「ちなみに主催者はTSCの社長だ」

TSC。Thousand Snow Companyの略称で、
世界でもそれなりに有名なゲーム会社だ。

はあ、これだから嫌になる。オキさんは一部の人間にとっては伝
説的な指導者だ。彼に教えられた八割強の人間が社会的に成功を収
めている。きっとその会社の社長も教え子か何かなんだろう。

「嫌そうだな。けどオレ、友達少なえからお前にしか頼めないんだ
よ。オレの代わりに行ってくれよ。一応オレの生徒だったんだろ？」

教え子の中で一割弱の失敗作に依頼しないで欲しいと思う。

02（オーツ）教室。スイスの山奥にあるオキさんが開設した
機関で、オキさんの指導プログラムを元に、厳格な審査をクリアし
た者だけを育成し、優秀な人材を育てるのが目的。

僕は高校から今の大学に入るまでそこで学んでいた。あまり言
いたくないがエリートだったのだ。

だから直接的な指導を受けていなくても、僕はオキさんの生徒と

いうことになる。

「別に欠席で良いじゃないですか」

わざわざ肩身の狭い思いはしたくない。オキさんだって、わざわざ代理を立てなくても欠席で良いじゃないか。

「いや、それがよ。欠席の旨を伝えたら代理を用意して欲しいって言われてな。

昔アイツを教えた時にセクハラしたことを持ち上げられて了承するしかなかったんだよ」

「あんた何やったんだよ!？」

教え子に手を出す指導者……本当にいたんだ。

「なら他をあたって下さいよ。パーティーにふさわしい教え子なら他にたくさんいるでしょう?」

「ああ、まあな。ただ、そいつらは皆オレと同じように招待されてんだよ」

なるほど、理解した。つまり一流会社の社長の招待を受けないプライベートな知り合いは僕以外にいなかったと言うわけだ……なんか虚しくなってきた。

「はあ、あの時のオレはどうかしてたよなあ……中学生ってのは恐ろしい」

オキさん、あなたの後悔に付き合っただけで、僕には心の余裕はありませんよ。

ってか中学生に手を出したのか!?

「でもですね……」

「え、なに？まさかお前ってスキー場での恩を忘れるような薄情な奴だったの？」

断る方向に持っていきたかった僕だったが、冬の話を持ち出され、それは叶わない。

オキさんと出会ったスキー場で僕は事件に巻き込まれ、危ないところを助けてもらったりした。

「……」

「……」

「……」

断りたい……けど、断れない状況に陥った僕。

笑顔で……けど、断らせないように眼で脅すオキさん。

蚊帳の外にされ、ご機嫌斜めでそっぽを向くイサ。

きつと僕らの周りにはファミレスとは思えないほど、静かできずぎすした雰囲気漂っているんだろう。

「はあ、わかりました。わかりましたよ、そのパーティーに出席すれば良いんですね？」

「お、助かるよ。いやあ、お前に頼んで良かった」

結局、折れたのは僕。適当に挨拶して旨い飯でも食って帰ろうとポジティブに考えることにした。

ちなみに、パーティーには同伴者一名まで可ということだったので、イサについてきてもらうことにした。

「なんか悪いな」

「別にいいよ。一度くらいお金持ちのパーティーってやつに参加してみたかったし」

良い奴だ。

やっぱりイサは最高の親友だよ。

目の前にいるロリコン疑惑の伝説的指導者とは違い、僕の中でのイサの株は急上昇だった。

四

パーティー当日、僕とイサは招待状に指定してあった場所に居た。僕らが住む五十音市^{イソネ}。その街で一番大きいホテル……そこに会場はあった。

「うわ、テレビで見たことある人とか結構いるし……」

「ねえ、サインとか貰って来ちゃダメかな？」

「ダメだ」

一応オキさんが貸して……というよりプレゼントしてくれたタキシードとドレスを着ている僕とイサ。

馬子にも衣裳とはよく言ったもので、ダークブラウンの短髪にだて眼鏡といった感じで平凡としか表せない僕も少しは見える奴になってるだろう。

ちなみにイサは僕なんかとは違って可愛いし、ドレスを着たら更

に……というか綺麗になっていた。思いの外日焼けしたイサの肌にドレスがマッチしている。

オキさんのそういうところは流石だなと思う。彼はセンスも素晴らしい。

……よし、もう良いだろう。オキさんを褒めるのは。ここからはただひたすら恨み言しかないのだから。

「ようこそいらっしやいました。あの忍海様の推薦人とのことで、社長も是非話をしたいとのことですが……後ほど大丈夫でしょうか？」

受付時、自らを秘書と名乗る茶髪ロングヘアーの女性に言われた言葉だ。

どうやら情報に不備……まあオキさんの説明に故意的な不備があったらしく、代理人としてではなく、オキさんのプライベートルームな友人として呼ばれたらしい。

「よくよく考えれば欠席するなら代行を立てるってバイトじゃあるまいし」

「忍海さん、ちょっと無理矢理だったしね」

嵌められた。この言葉が今の僕に一番しっくり来る。そして何より帰りたいという願望が急上昇した。

「ま、覚悟決めるか」

「人間諦めは大事だよ。ってユウのことを諦めてないウチが言うのも変だけど」

「ははは、鴨肉に血のソースか。うん、中々いけるもんだな」

「うわあ、不自然過ぎる話の逸らし方だよ」

料理が旨かったこと、いつもとは違うドレス姿のイサが見れたこと。よし、収穫はあった。さっさと社長さんに会って、せいぜい幻滅させてから帰るとしますか。

「あの、社長との件ですが……今からでもよろしいでしょうか？」
「ええ、構いませんよ」

受付時に会った女性に、なるだけ紳士的に答える僕。イサはどうやら某ソフトボール選手を発見し、話し掛けに行ってみたようだ。このミーハーめ。

「それでは、こちらへどうぞ」
「はい？ここでも良いんじゃないですか？別に個室に行く必要もないでしょう」

そうそう、今日はもう一つ収穫があるんだった。

「あの、それは一体……？」
「だって話なら僕とあなただけで成り立つでしょう？TSC社長、
千雪^{チユキ} 千重^{チエ}さん」

それは、このパーティーの主催者がとても綺麗で、ユニークな女性だってことだ。

「いつから気づいていましたか？」

パーティーの後、ある場所に向かうため、僕とイサはリムジンに乗っている。

車が動き出すと、僕らに向かいあつて微笑みながら訊ねてくるチエさん。

「そうですね、最初に話し掛けられた時から違和感は感じてましたよ」

「良ければ教えてもらえませんか？」

02教室に入るための条件は、八十八科目のテストを受け、その中で一つでもトップの成績を出せればクリアとなる。つまり、必要なのは万能型ではなく、一能突出型。

僕がクリアしたのは観察力の科目。故に、見破るのは簡単だった。

「あなた自身……というより周りで気付きました。いくら装っていても護衛であつたり本当の秘書はあなたに対して注意を向けていましたから」

「はあ、やっぱりか……」

「やっぱり？」

「ええ、今回のパーティーで貴方の他に一人だけわたくしの正体を見破った人がいまして……その方にも同じことを言われました」

一人だけだったのか……けど確かに乾杯の際、いきなり秘書が挨拶をし出して皆びっくりしてたよな。

そういや今日のパーティーまで社長の写真は公開されてなかったらしいし。

「ちなみにその方は希^{ノソミ}之家^{ノエ}という変わった名前の探偵さんです」

「……」

聞き覚えのある名前に僕は固まる。ほぼアイツだろう……。o2生時代、僕と同じ教室だった魔女。

八十八科目のテストで、六十七科目一位だった一能突出ではなく、万能突出型の年齢不詳女。

「おや、その様子だとご存知のようですね」

はあ、やっぱり来るんじゃないかと、僕は改めて思いながらも、車は僕の家ではない、ある場所に向かって進む。

「そういえばウチらってどこに行くの？」

「いや、僕もよく知らないんだよ。千雪さん、そろそろ教えてくれないんじゃないですか？」

イサの質問の答えを僕は知らないの、今まではぐらかしていたチエさんに訊く。外を見ると随分と山の中に来ているようで、リムジンも頻繁にカーブしている。

「そうですね、流石にここまで来たら簡単には帰れなさそうですし」

おい、何だか怖えよ。まあ僕がずっと帰りたいオーラを出していたのが悪いのかも知れないけど。

「もう腹はくくりましたよ、帰りませんから」

「そう、良かったです。それではお教えしましょう。目的地はわたくしが所有する山荘でして、そこでまあいわゆる二次会でもしようかと考えてます」

「二次会……ですか」

「ええ、わたくしが個人的にもう少しお話をしたいと思っている方達だけで。遠方から来られている方もいますので数日は続く予定です」

チエさんの説明にうんざりする僕。それを察したのか、

「安心して下さい。明日の朝まで結構ですから。もちろん車で送らせていただきます」

「はあ、どうも」

隣のイサも嫌そうにはしてないし、一泊くらいなら妥協しよう。そうこうしている内に、僕らを乗せたリムジンは目的地に到着する。

「うわっ……」

チエさん、これは山荘なんかじゃない。一般人からしてみれば百人が百人僕のようにこう突っ込む筈だ。

城じゃん！

……まあそんなところ。

六

八人。客としてこの山荘もとい城に来た人の数。

僕らが来たときにはもう皆揃っており、主催者と共に来たこともあり、注目の的になってしまった。

やはりというべきか、魔女ことノエも来ており、キセルをくわえて相変わらずの冷やかな眼で僕を見ている。

美人、長身、黒髪ポニーテール、本人曰くDcupのバストと僕のタイプど真ん中だけど、何故か全くときめかない……それがノエだ。いや、失礼だけどそれが本音。

「おや、かわ可愛いユウちゃんじゃないか。こんなところで会うなんて、スズは嬉しいよ」

このややこしい喋り方……まさか〇2生がもう一人いたなんて。

「お久しぶりです。左之射先輩」

左之射 涼。

ノエとは対照的な可愛い系、低い身長、黒髪ショートボブの〇2生時代の先輩……実は初恋の相手だったり。

謎だ。僕のタイプとは全く違うのに〇2生時代、僕はスズ先輩に夢中だった。

「あら、この方が姉様のお気に入りですか？」

スズ先輩の隣、ノエと同じくらい長身で茶髪ウェーブの女性が言う。

確かスズ先輩に写真で紹介された。

左之射 園。スズ先輩の妹。

「ねえユウ、あの人達ってさ。アノ左之射財閥の人達？」

「えっ？ ああ、うん」

イサがめちゃくちゃ驚いてる。そりゃそうだろう。

左之射財閥。この山荘……もう山荘でいいや。その持ち主である
チエさんの会社TSCの資金提供をした財閥であり、日本一の財力
を持つグループ。その令嬢と普通に話している僕。
普通に驚くだろう。

「中々人脈がおありのようですね。ますます貴方が興味深くなつて
きました」

「はあ、せいぜい期待を裏切らせてもらいますよ」

期待値が高い。本当にそういうのは苦手なんだよ。

「こんな有名人に会えるなんて……一生の思い出だよ」
「そうだな」

感動しているイサに、適当に相づちを打つ僕。そんな態度に、無
感動な人間だなとイサは睨む。

けど、そんな無感動な僕でも、これから起こる出来事は一生忘れ
られないものになる。

この時の僕は、それを知るよしもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9043p/>

一つのシタイ-最期の交友-

2011年1月9日05時04分発行